

〈技術資料〉

沖縄の弦楽器（さんしん）竿の塗装

Coating Specification of Okinawa Strings

大城 直也

キーワード：三線、漆、うるし、弦楽器、沖縄

Keywords: Sanshin, Japanese Lacquer, Urushi, Strings, Okinawa

1. はじめに

沖縄の伝統的な弦楽器の三線（さんしん）は、本土でもポピュラーな楽器として知られるようになってきている。現在も多く沖縄のアーティストが、この三線の音色を盛り込んだ楽曲を数多く発表している。

琉球（沖縄）の三線（さんしん）のルーツは中国の三弦（サン・シェン）であり、日本本土の三味線へと伝播していったとされている。木素材の胴（太鼓）にニシキヘビの革を張り、絹糸等を素材とした3本の弦を水牛などの爪で弾き、音を奏でる。

三線は昔から沖縄の芸能文化の重要な位置を占め、単に音を奏でる楽器というもの以上の特別な存在とされた。家宝として扱われることも稀ではなく、特に竿については戦時中に家を離れる時、「他の家財道具は残しても竿は担いで逃げる」という逸話も聞かれ、非常に大切にされていたことがうかがえる。

現在、沖縄では年間約3万丁を超える三線が販売をされている。素材や技法は様々であるが、三線の竿のほとんどに塗装が施される。竿は楽器の部位でも指で触れる部分であることから、

美観や表面保護などにとどまらない、触感や指の滑り具合など、楽器ならではの要素が求められる。

2. 竿の木素地と塗装

木素地と塗装の関係であるが、使用する木材は琉球黒檀やイスノキなどが最良であり、かつ芯部の暗色部分が特に珍重される。素材の固さや重さなどが、弾きやすさと音質に良い結果を出す。これらの硬質木材の場合、無塗装で仕上げることもあったが、現在はほぼ例外なく塗装が施される。

需要が増え、ニーズが多様化したため竿の木素材も様々なものが使用されるようになった。それにともない、従来本漆が主であった塗装にウレタン、ポリエステルなど洋塗装が加わり、現在では大多数を占めるようになってきている。特に軽軟木（ヒバ等針葉樹、ラワン等広葉樹）を素地とし、かつ不透明塗装の場合はこれら洋塗装が主体となっている。

今日、本来の塗装法である本漆塗りを施すのは、黒檀などの良質な木素材であること、素地を活かす仕上げであること、演奏時に指の滑りやすさを求めること、などの要求に対応する場合となっている。漆塗りの工程は沖縄の伝統工芸品である琉球漆器と基本的に同じである。そのなかから竿の塗りには摺り漆、春慶塗、呂色仕上げなどの技法が用いられる。本稿では呂色

2012年11月1日受付
OSHIRO Naoya